西洋中世哲学史　第 1 回（2015.04.14.）

Q. 1　第二外国語はドイツ語を学んでいました．スケプティコイ，懐疑派というのが出てきましたが，懐疑派のことを，スケプティコイと呼ぶということでしょうか？

A. 1　そうです．スケプティコイ (σκεπτικοί, skeptikoi) というのは，ギリシア語で，懐疑派のことです．スケプシス (σκέψις, skepsis) といのは，本来，「考察（すること）」ですが，疑いをもって「考察」することから，単に，「考える」よりも「疑う」という意味で使われ，スケプシス=懐疑，という意味で使われるようになりました．そして，スケプティコイというのは，「懐疑する人たち」という意味です．

Q. 2　矢玉さんは，何歳で亡くなられたのですか？

A. 2　彼の生没年は，1961 - 1996 年となっていますから，35 歳でしょうか．

Q. 3　（学んだ，あるいは，学んでいるのは）フランス語，ラテン語．大変申し訳ありませんが，どちらも実用レベルでは習得しておりません．日本語であれば辛うじて話せます．

A. 3　非常に，謙虚な言い方をされていますが，大変，結構でございます．

Q. 4　外国語：英語・ドイツ語．質問：キリスト教って，異教を排斥するイメージでしたが，ギリシア哲学については，そうでもないのですね．調和しているとも言いがたいですが...

A. 4　イエス自身は，アラム語（ヘブル語・ヘブライ語の仲間）を使っていたと思われますが，新約聖書が，コイネーと呼ばれるギリシア語で書かれたことが，キリスト教とギリシア哲学を結びつけることになった大きな理由のひとつでしょう．というより，ギリシア語の一種であるコイネーを使っていた人たちの間で，キリスト教が生じた，と考えたほうがよいかもしれません．ですから，この意味で，キリスト教とギリシア語は最初から切っても切りはなせない関係にあるということです．しかし，キリスト教は，もとが，ヘブル語（ヘブライ語）に基づいた，ユダヤ教ですから，ギリシア語のロゴスとユダヤ教が結びついたところに，キリスト教が成立している，と言っているのです．

西洋中世哲学史　第２回（2015.04.21.）

Q. 1　ギリシャ語に（ママ）はなぜ英語風に直せるのですか.

A. 1　音写（音を別の文字で写し取ること）といって，ローマ字で移す場合は，ローマナイズするといいます．そうすれば，ギリシア文字を知らない人でも，音がわかるからです．ローマ字以外を用いている言葉の場合に，よくやることです．発音記号のかわりだと思えばよいでしょう.

Q. 2　遅れて教室に入ったら，赤井先生が自治会について語っていて，何事かと思いました.

A. 2　ホワイトボードに，誰が書いたのか,「広島大学学生自治体（ママ）」と書いてあったので，自分が学部３年のとき，自治会の執行委員をやっていたのを思い出して，つい，語ってしまいました.

Q. 3　中世ヨーロッパの暗黒の時代のイメージは，アリストテレスからの学問の系譜によるものだと思われます．ヘレニズム後のキリスト教の台頭により科学の発展しなかった時代.

A. 3　ホワイトヘッドの『観念の冒険』風の意見でおもしろいと思います.「アリストテレスからの学問の系譜による」という辺りをもう少し詳しく教えて下さい．ホワイトヘッドの『観念の冒険』が触れていない観点としては，カトリックに対するプロテスタント，宗教改革の結果が，ヨーロッパの近世の哲学・思想（自然科学も含めて学問全般）に及ぼした影響があると思います.

Q. 4　外国語：英語，中国語，サンスクリット語入門という授業をとっています.

先生はオリキャンをどう思っているのですか？

キリスト教徒たちは，最後の審判がこないことに疑問などを思ったりしないでしょうか？ 自分たちで起こそうとなったこともないですか？

A. 4　サンスクリットの文法を学ぶことは，頭のトレーニングにいいので，是非，やってください．ただ，某Ｏ先生には，いつも言っているのですが,「サンスクリット」だけで，すでに「完成された言語」というか，訳語としては,「梵語」の「語」の部分まで含んだ名称なので，科目名にあるのかもしれませんが,「サンスクリット語」と書くと,「梵語語」と言っていることになるので，ちょっと変です（時間割では,「サンスクリット語入門」「サンスクリット A」とか「サンスクリット B」とか,「語」のあるのとないのとが混在していますね）.

オリキャンは，オリキャンがないと，友達ができない人にとってはよいかもしれませんが，適当に切り上げて，自分一人で勉強する時間を確保するほうがよいと思っています．まぁ，人それぞれでよいと思います.

「最後の審判」は，人間が自分たちで起こすものではありませんし，自分が生きている間に起こらなくても,「最後の審判」はあるはず，と信じるのが，信仰の次元ですから，信仰をもつ者にとっては，疑問はないはずです.

西洋中世哲学史　第３回（2015.04.28.）

Q. 1　宗教や哲学において，その普遍性は前提，又は目標だと思っていたのですが，原典を読解できないと理解のスタートラインに立てないのかな，と今回の講義で思いました．それってとても限定的なことだととも思いました．

A. 1　短い言葉による感想ですが，解釈の仕方によって，重要な問題を指摘してくれている，と思います．「普遍性」と言われていることが，「誰にでもできるし，誰にでもわかる」ということであれば，「誰にでもできるし，誰にでもわかる」内容やそういうレヴェルの哲学（宗教は，ここでは別にしておきます）というのはあるでしょう．そこでは，専門的な哲学史の研究は必要ないといえるでしょう（デカルトの『方法序説』第１部冒頭の「良識はこの世で最も公平に配分されている」というのを，そのまま脳天気に，「良識が配分されているから大丈夫」と受け取っているようでは，そもそも，哲学するのには向いていません．デカルトも，少し先のところで，良識はもっているにしても，「正しく使う」ことが大切だ，と言っています）．しかし，大学で，学問としてやろうとしている哲学は，そういうものではなく，むしろ，そういう，「誰にでもできるし，誰にでもわかる」哲学を可能にするための研究です．そして，そのためには，必要な道具がいくつかあります．そのひとつが，哲学史の研究のための，原典の読解力です．そういう意味で，原典を読解できないと理解のスタートラインに立てませんし，それは誰にでもできることではなくて，道具を身につけた，限られた人にしかできません．ただし，それは，（赤井の他の授業でも言っていますが）学としての哲学の場合です．また，哲学史の研究ではなくて，問題そのものを考察するためにも，論理的思考力などが，必要です．そして，これも，実は，ある程度までは，誰にでもできると言えますが，あるところからは，誰にでもできるわけではない，というのが，例えば，プラトンの考え方です．残念ながら，素質による向き不向きはある，というのです．一定の素質のあるものが，一定期間，しかるべき訓練を受けて，はじめて可能になる，ということです．逆にいうと，素質の点では，不向きの者も，それを補うために必要な訓練を受ければ，その素質にとって可能なところまでは，わかるようになる，ということでもあります．また，素質はあるのに，しかるべき訓練を受けていないものも，わかる程度に限界がある，ということになります．しかし，このことに気付いていないか，実は気付いていても，素質がないのに，あるふりをしたり，しかるべき訓練を受けていないのに，受けているふりをして，哲学をしている，と称する者がいるのが，今も，昔も，現状なのです．

だからプラトンは，次のようにきびしい言葉をあびせているのです．

> Τὸ *γοῦν νῦν ἁμάρτημα*, *ἣν δ᾽ ἐγώ*, *καὶ ἡ ἀτιμία φιλοσοφίᾳ διὰ ταῦτα προσπέπτωκεν*, *ὃ καὶ πρότερον εἴπομεν*, *ὅτι οὐ κατ᾽ ἀξίαν αὐτῆς ἅπτονται· οὐ γὰρ νόθους ἔδει ἅπτεσθαι*, *ἀλλὰ γνησίους*. [Plato, *Respublica*, VII, 535C5-8]
>
> 「少なくとも，現在行なわれている間違いと，哲学にふりかかっている軽蔑とは，こうしたところから起こっているのだからね」とぼくは言った，「つまり，前にも言ったように，その資格もないような人々が哲学に手をつけているからなのだ．というのは，生まれのいかがわしい者たちがこれに手をつけてはならなかったのであって，正しい生まれの者たちにだけそれが許されるはずだったのだから」(藤澤令夫訳)

Q. 2　私はヤスパースの説いた方法で哲学に触れていこうと思います．ショーペンハウアーの方法だと，人生がいくつあっても足りないように思うからです．

A. 2　ヤスパースのやり方で結構だと思います．しかし，与えられた一度の人生の中で，できるかぎり，ショーペンハウアーの方法でいく，というのもありかな，と思います．

Q. 3　聖書の作者は神である，ということをふまえて聖書を読むと面白そうだと思いました．

A. 3　神が，予言者や，パウロを使って書かせた，という構図でしょうか．しかし，『新約聖書』は，「福音書」を別にすると，キリスト教というより，パウロ教という感じがしてしまいます．

Q. 4　先生はギリシャ語やアラビア語ができるようですが，何ヶ国語できるのですか？ また，先生はなぜそんなにいろんな言語ができるのですか？ アラビアでもアリストテレスや哲学についての学問があることに驚きました．

A. 4　最初の点は，高校，大学学部時代のことに関わり，それについては，以前，『人文学へのいざない』に書いたことがあるので，それをご覧下さい．極東の日本でも，ギリシア語でアリストテレスを読んで研究している人たちがいたり，すでに，すべて日本語訳された『アリストテレス全集』があるのに，今，二つ目の『アリストテレス全集』が刊行されつつあることのほうが驚きだ，という人がいるかもしれません．

Q. 5　先生は語学に堪能でいらっしゃる様ですが，何ヶ国語を扱えるのでしょうか．

哲学書は読んでも病気にならないと仰りましたが，得る情報が偏ると，やはり心（精神）を病むものとだと思います．情報化，マスメディアがネットにとって代えられ，まだ身体（精神，知性）が作りきれていない成長途上の人々が知識（情報）の偏食，暴食を容易に可能にすることによって，その傾向，あるいはそれを象徴する主張が強まってきているのではないでしょうか．確かに，本を読んで即死することはありませんが．

「人は，その人が何を読むかできまる．」W. H. Auden

A. 5　読むのは，それが何語で書かれていても，これは，あやしい，自分で読まなければ，と思う文献だけです．これは，あぶない，とか，これは，あかん（いけん）と途中で気付いて読むのをやめることのできる能力があればよろしいが，そうでなければ，たしかに，身体的には，直接，害がなくても，精神的に，こころの面で，あるいは，魂を病む，という状態を引き起こすだろうと思います．

オーデンの言葉を引かれているので，私も，ここのところ，他人を見ていて気付いたことをひと言．「自分の専門外のことにどう対処するかで，その人の哲学はきまる」

Q. 6　先生は原典だけでなく訳本も読むことあるんですか？

A. 6　翻訳が存在し，入手できれば（できないこともある）できるかぎり読みます．しかし，原著者がどういっているかを読み取るよりどころは常に，翻訳される前の原典です．ただ，古代・中世，それに近世初頭の，古典的著作の場合と，20世紀や21世紀の（つまり，現代の）著作の翻訳では，同じ翻訳といっても，扱い，というか意味合いが異なります．

西洋中世哲学史　第４回（2015.05.12.）

Q. 1　Disputationes Quodlibetales の授業の話は講義担当の先生の力量が試されるだけでなく，受講する生徒自身の力も試されるので，大変よいと思いました．ただ，頻繁にはやりたくないですが．

A. 1　現代の大学では．何か，企画ものとして，シンポジウムや討論会のようなものを行なうときに，「随意討論」に近い状況があるかもしれません．

ところで，これに対して，現在，大学の学部で，哲学・西洋哲学史を学ぶときに，どういう訓練が必要かというと，これは，昔から（少なくとも，現在のような大学に日本に作られた明治以来）変わらないと思います．それは，学生の側から見ると，

1) 必要な外国語の文法の学習，

2) 概論や哲学史の講義を聴くこと，

3) 1) に基づいて，テクスト（原典）を読解する演習・講読に出席すること，

4) 自分の問題を見つけて論文を書くこと（途中経過をゼミなどで発表して，批判を受けること），

以上の４つです．中でも，3) と 4) が重要です．1) と 2) は，自分一人でもある程度まで，独学でいけますが，3) は，自分の理解の間違いをただしてもらう絶好の機会です．

自分の学部 1〜4 年生のときの記録を見てみると，

1) については，1〜2 年のうちに，教養部（教養科目）で，英語，ドイツ語，フランス語，ラテン語，ギリシア語，ロシア語，中国語の授業に出て，3 年になってから，文学部で，イタリア人の先生のイタリア語の授業に出て，それに，卒業要件の単位とは別に，英会話，フランス語会話，ドイツ語会話の授業を提供している，言語センターの授業に出ました．2 年のときに，同じ学年の学生どうしで，ギリシア語を学んでいる連中と，ギリシア語で，アリストテレスの『ニコマコス倫理学』を，それから，インド哲学志望の人達と，Radhakrishnan, *Indian Philosophy* という英語の本を読む会をやりました．

3) について，赤井の学部生のころの記録を見ると，卒業要件を越えて（越えた分は，選択科目の単位に数えてくれたんではないかと思います），多くの演習・講読をとっていました．そもそも，学部生の単位にならない，大学院の演習にも許可してもらって出ていました（Whitehead, *Process and Reality*（『過程と実在』英語）．他には，２年生のうちに，Leibniz, *Le système*（『新説』フランス語原典とそのドイツ語訳），Bultmann, *Geschichte und Eschatologie*（『歴史と終末論』ドイツ語），Croce, *Teoria e storia della Storiografia*（『歴史記述の理論と歴史』のドイツ語訳），そして，3〜4 年生で，Kant, *Kritik der reinen Vernunft*（『純粋理性批判』ドイツ語），Hegel, *Phänomenologie des Geistes*（『精神現象学』ドイツ語），Descartes, *Discours de la méthode*（『方法序説』フランス語），Leibniz, *Discours de métaphysique*（『形而上学叙説』フランス語），Platon, *Phaedo*（『パイドン』ギリシア語），Aristoteles, *Analytica Posteriora*（『分析論後書』ギリシア語），Thomas Aquinas, *Expositio in Analyticorum Posteriorum libros*（『分析論後書註解』ラテン語），Plutarchus, *Plutarch's Lives*（『対比列伝』ギリシア語），Cicero, *De re publica et de legibus*（『国家』『法律』ラテン語），他に，英国人教師の Shakespeare を読む講読や，荻生徂徠の『論語徴』を読む講読にも出ていましたが，これは，狭い意味での，西洋哲学史ではないので，別にしておきます．

3) は，授業だけでなく，学生たちが，自主的に組織して行なう，自主ゼミとか読書会とか輪読会とか，名称は様々ですが，授業では取り上げられていないけれども，自分たちで読みたいテクストを読む会を行なうことができます．そういうものとして，授業以外で，まず，自分一人で読んだものは，Aristoteles, *Categoriae*（『範疇論』ギリシア語）です．また，やはり，授業以外で，学生どうし（院生に参加してもらったりして）で読んだものは，Bonaventura の *Itinerarium mentis in Deum*（『精神の神への道程』ラテン語）とか，Engels, *L. Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie*(『フォイエルバッハ論』ドイツ語），Rivaud, *Histoire de la philosophie* (『哲

学史』フランス語）などです．

他に，アリストテレスについての研究書や，研究論文など，日本語のもの以外にも，英語，ドイツ語，フランス語，イタリア語のものなどを一人で読んでいました．

それから，当時，まだ日本語訳がなかった，Xenophon, *Apologia Socratis*（『ソクラテスの弁明』ギリシア語）を日本語に訳して，文学部自治会で発行していた『明日へ』という機関誌に掲載しました．

他に，英語の本も結構，読んでいるはずですが，いちいち，挙げている紙数はないので，まとめると，ポイントは次の２点でしょう．

ひとつは，授業で読んだテクストは，例えば，カントの『純粋理性批判』のように，何百ページもある大著は，授業に出た 1〜2 年では，数十ページしか読んでいませんが，翻訳で読んだのとは違って，原典ではどう書いてあるのか，それをどう読むのかを，先生や院生などに教えられた，ということが貴重な体験で，それに基づいて，授業で扱わなかった他の部分を，一人で読む際の参考にできる，ということです．実際，私が出ていた，カントの『純粋理性批判』の演習は，はじめからおわりまで読み切るのに，26 年かかったと聞いていますから，全部通して出席したのは，先生だけだったと思います．もっとも，先生は，演習で読み始める前に，すでに，何回も，通読しておられたことでしょうが．

もう一つは，特に，原典がギリシア語，ラテン語の場合，原典を読むのが基本ですが，例えば，アリストテレスの場合，2000 年以上のアリストテレス研究の歴史があるので，原典のギリシア語に対して，ギリシア語で書かれた註解，ラテン語で書かれた註解とラテン語訳，同じく，近代語でも，英語で書かれた註解と英語訳，ドイツ語で書かれた註解とドイツ語訳，フランス語で書かれた註解とフランス語訳などを，同時に読んでいく必要があるので，はじめのうちは，ギリシア語を読むだけで精一杯でも，少しずつ，英語，ドイツ語，フランス語，ラテン語と読めるようにしていき，各時代，各国の註解者や翻訳者がどう読んでいるかと，自分自身の読みをつきあわせて検討する，という哲学史研究の方法が，同時に，自分の頭で問題を考える，哲学のトレーニングにもなるのです．

これはしんどい作業かもしれませんが，この程度の学問的トレーニングを学部時代から受けていない人には，学問としての哲学をやっているという資格はないと思います．

Q. 2　自作の格言が他にもあれば教えていただけないでしょうか．

我々は，解の方程式を「信じている」と仰いましたが，はたしてそうでしょうか．道具主義に対して，公理のもとに使っているだけではないのでしょうか．

実証主義を基本とする現代の学に信の余地は残されているのでしょうか．

A. 2　自分で格言をつくるという言い方は，へんですね．しばしば，使っていると，それを他人が見て，使うようになって，格言のようなもの，になるのではないでしょうか．たんに，ラテン語で言っているだけなので，見る人が見れば，なにを，たわごとを，と言われるでしょうが，最近では，Nolite ioco uti です．

前回の授業で問題にしたのは，トマスがいう fides（信仰，信じること）と，現在の私たちが，日常的に「信じる」（そうだと思っている）と言うときに，意味が違う，ということでした．後者の意味で，つまり，そうだと思っている，というレヴェルで，「公理のもとに使っているだけ」と言えると思います．これが，研究対象を限定した，個別科学（個別学），領域学が，基づいている，仮言推理の在り方です．つまり，「もし〜であれば，・・・である」という形式で，前提の「もし〜であれば」という部分を，そうだと思う，という意味です．ですから，それを絶対的に疑いえないこととして，トマスが言う意味で，信仰しているわけではありません．ただし，この場合，詳しく言うと，前提（命題）それ自体が真であるかどうか，ということと，前提（命題）と結論（命題）の結びつきの（つまり，推論の）必然性，ということの二つを区別して，信じる，とか，そうである思う，という問題を扱う必要があります．

西洋中世哲学史　第５回（2015.05.19.）

Q. 1　「哲学者」としてアリストテレースが代表されて登場したので，哲学を学ぶ者としてはやはり一度は触れておくべき存在なんだと改めて実感しました．

A. 1　誤解のないように，確認しておきますが，トマスなど（中世の神学者・哲学者）が，ラテン語で，端的に，Philosophus（大文字で，哲学者）と言えば，アリストテレスのこと（だけ）を指します．また，Commentator（註釈者，註解者）と言えば，アヴェロエス（イブン=ルシッド）のことを指します．これが，中世の人達の共通理解・共通の言葉使いなのです（中世を研究していれば常識）．しかし，例えば，現在，ドイツ語圏で，古代哲学史，それも，特にアリストテレを研究している人が言っていることには，現代のドイツ語で，Philosoph（フィロゾーフ）と言えば，プラトンを指す，というので，それでは，アリストテレスは？ と尋ねると，Wissenschaflter（ヴィッセンシャフトラー，学者）というほうがぴったりくる，ということでした．これは，この研究者とその学派の人達の感覚なので，ドイツ語圏ではどこでもそうだというわけではないかもしれませんが，中世のラテン語の Philosophus は，Aristoteles で，Commentator は，Averroes です．

なお，アリストテレスには，一度触れる程度では，素人で終わってしまいますから，何を専門にするにせよ，ギリシア語原典でしっかり読んで下さい．アリストテレスを批判するにせよ，援用するにせよ，テクストを読んでいない人の言うことは，学問的に信用できません（から，相手にする意味がありません）．今，在籍している大学に，せっかく，ギリシア語の授業が開講されており，ギリシア語の文献を読む授業もあるのですから，これを利用しない手はありません．

Q. 2　AaB，BaC などの表記がありましたが，小文字の a が「は」を意味するのはなぜですか？数学でそのように決められているのですか？

A. 2　a は「は」ではありません．a は，全称肯定命題を表す古典論理学の記号です．ラテン語の affirmo（肯定する）から，a（全称肯定）, i（特称肯定），nego（否定する）から，e（全称否定），o（特称否定）の４つの記号が使われます．これも，哲学・西洋哲学史を学ぶ際には，知っているべき常識ですから，別途資料で少し説明しましょう．

Q. 3　現在，法学部で開講している政治思想史でも，トマス=アクィナスを取り上げていますが，法学部の学生が哲学を学んでいることに先生はどのように感じていますか．

A. 3　結構なこだと思いますが，日本では，トマスの研究は，実は，人文系の哲学・哲学史よりもはやく，社会科学系の経済学者によって，トマスの経済思想が研究されていました．福田徳三博士（明治７年〜昭和５年）の論文「トマス・ダキノの経済学説」（『経済学研究』，明治 38 年），上田辰之助（明治 25 年〜昭和 31 年），五百旗頭真治郎（明治 28 年〜昭和 33 年）らと続き，特に，上田教授の学位論文は，『社会職分を基調とするトマス・アクィナスの経済思想に関する研究』（昭和 10 年）で，自邸を「多摩書屋」（トマスヤ）と名付けるほどの傾倒ぶり，と言われています．倫理学や政治思想に言及しているような哲学者ならば，法学部では，法哲学や政治思想史で取り上げられるのは，むしろ，当然のことでしょう．この傾向は，近現代では，ロック，ヒューム，ミルなど，イギリスの思想家についても，言えます（ただ，その研究が，どこまで，原典に基づいて行なわれているかが，学問としての水準を決めることになります）．

Q. 4　第一基本命題=公理，ということでよいのでしょうか．

A. 4　公理だけでなく，むしろ，公理はごく一部に過ぎず，公理以外の命題のほうが数において多いので，全体としては違います，と言っておきましょう（例外的に，よい場合もありますが）．つまり，ある個別学・領域学（例えば，トマスの時代の例で言えば，天文学）が，その学が自分では，その命題が真であることを証明・論証せずに（できずに），認める，具体的な内容をもった命題です．天文学の場合は，その命題の証明・論証は，数学や幾何学に委ねています．すべての学問に共通しているのは，例えば，矛盾律や排中律ですが，これ自体は，抽象度が高くて，具体的な内容をもっていない，論理法則，思考の法則とでもいうべきものなので，特別な場合を別にして，第一基本命題とは，トマスもアリストテレスも呼びません．この辺りのことは，アリストテ

レスの『分析論後書』とトマスの『アリストテレス『分析論後書』註解』を読んで下さい，と言っておきましょう．

Q. 5　神学大全（ママ，『神学大全』）の p1. a1 (ママ，P. I, a. 1，または，I, a. 1) 主文については，「人間は救済されなければならない」という定言命法がおかれているように思えます．信に対して知で論駁することはナンセンスだと思います．

A. 5　『神学大全』（略して，『スンマ』）は，聖書を認め，信仰をもつ者を対象に書かれています．従って，『神学大全』を理解するためには，というよりも，これを読もうとする者は，「人間は救済されなければならない」ではなくて，なんとかして，「人間が救済される」ことを希求する人たちです．従って，その人たちの前提からすれば，十分に意味のある議論なのです．しかも，展開される議論自体は，十分に論理的・哲学的です．しかし，今，自分が，キリスト教徒でもなく(現在の多くの日本人がそうでしょう)，従って，「人間が救済される」ことを希求していなくても，(自分とは違うと意識しながら）そういう人たちの立場に自分をおいてみなければ，『スンマ』の記述の意味はわかりません．テクストを読む際に，どういう人を対象に書かれているのかを取り違えると，テクストを誤解することは，古代の場合も，近世の場合も，よくあることです（ある意味では，誤解で歴史が成り立っている，という場合もあるでしょう)．私も，トマスが対象にしていたような，「人間が救済される」ことを希求する人たちには，含まれませんが，仮に，そういう立場に自分をおいて，『スンマ』を読むと，哲学的な議論として得るところが大きいのです（これは，実際にテクストを読んでもらわなければわかりません．特に，トマスによる，アリストテレスの著作への註解はどれも大変，勉強になります，というか，哲学的にも，哲学史的にも価値のあるものだと思います．これがもっと読まれないのは，単に，日本の近現代の哲学研究者の学力の低さを露呈しているだけだと思います)．この点で，信仰がない人にとっては，ナンセンスだ，と言って，トマスのテクストを敬遠している日本（日本にかぎりませんが）の哲学の研究者（近現代の専門家に多い）は，せっかく，トマスの展開する哲学的な議論から学ぶことができるのに，それをしないで損をしていると思います．もっとも，ラテン語が読めないから，というのであれば，そういう手合いは，西洋のことを研究している学者としては，まして，哲学をやっている学者としては，学者というに値しません．他方，トマスは，聖書の権威を認めない人たち，つまり，キリスト教徒ではない人たちを対象に，『対異教徒大全（護教大全)』(*Summa contra gentiles*) を書いています．なお，「知」と言われていることの中に，推論や論証が含まれるとすれば，先ほどの，Q. 4 との関連でいうと，推論や論証が無効なのは，その推論や論証が基づいている，第一基本命題の部分だけであって，第一基本命題（つまり，その時々の議論で，推論の前提となる命題）を承認する相手に対しては，それ以外の部分（帰結，結論命題）については，推論や論証が最も有効で，説得力があるものなのです．

西洋中世哲学史　第６回（2015.05.26.）

Q. 1　論理学の記号の p, q とかに意味はあるのでしょうか？ あと，この授業（ママ，「は」が必要），論理学についての授業でこれから進むんですか？

A. 1　論理学についての授業（ってなんか，いやだからやめてくれって，いうことでしょうか）というより，中世論理学の基本的な知識をもった上で，テクストを読んで欲しいので，その知識を得てもらうための授業を挿入している，というところでしょうか．受講している諸君が，あらかじめ，西洋論理学史のうち，古代と中世の部分の知識をもっているならば，必要ないことです．前回から，実際にテクストを読んでいるトマスの『神学大全』の場合（他の著作でもそうですが），随所に，普通にラテン語で書かれていながら，論理的形式に従った叙述が見られますので，その論理的形式を知らなければ（意識しなければ），トマスの言っていることがわかったことにはならないでしょう．

数学で，y=f(x) とか，y=g(x) とかいうときの，f は，function(関数) の頭文字 f を使って，それ以降は，g, h・・・というようにしているのと同様に，命題を表すために，proposition(命題) の頭文字 p を使って，それ以降は，q, r・・・というようにしているのだろう，ということを授業中に説明しましたが，この説明では満足しませんか（それとも，聴いていなかったのですか）．「記号の p, q とかに意味はあるの」か，と訊かれても，例えば，p が具体的に，どういう命題を指すのかは，その都度，定められる（示される）べきことなので，一般的には，言えません．プリント p. 2, ll. 48〜52 の例では，p は「今日は晴れている」で，q は「今日は暖かい」ですが，ll. 77〜80 の「推論 (1)」では，p は「義昭は哲学者である」で，q は「義昭は腹が出ている」です．このように，命題を表す記号 p, q, r・・・は，その都度，定められる（示される）ものです．

つまり，「論理学の記号の p, q とかに意味あるのでしょうか？」ということで，何を質問しているのか，わかりませんので，上述のこと以上のことを尋ねているのならば，もう一度，何を訊いているのかわかるように説明を加えて質問して下さい．

Q. 2　ソフィストが教えていた弁論術は，今回やった論理学の要素もあったりしたのですか．

A. 2　論理学の本来の目的は，真である前提命題に基づく，妥当な推論によって，真である結論命題（学問的知識）を得ることにあるはずで，アリストテレスの論理学書（「オルガノン」）のうち，最初から４つ（『カテゴリー（範疇）論』『命題論』『分析論前書』『分析論後書』）は，この問題を扱っていますが，５番目の『トピカ』は，問答法による知識の獲得を，そして，最後の『ソフィストの論法（詭弁論駁論）』は，問答の相手が詭弁を使っているときに，それを見抜いて論駁するための考察を展開しており，表題からもわかるように，これがソフィストの論法を扱っている，といえるでしょう．

Q. 3　記号についての説明をしてくださり，ありがとうございました，確かに，論理学の授業があればいいのに，と思いました．同時に自分の知識不足を痛感しました．

A. 3　（かろうじて哲学の分野で「論理学」の集中講義があるだけで，それ以外に）論理学を学ぶ機会を設けていないのは，大学の責任でしょう．しかも，あなたのように，自分の知識不足を痛感するような人はまだよいほうで，自分には論理学の知識が欠けていることに気付いてさえおらず，それで哲学をやっているつもりになっている人がここでは多いのではないでしょうか．その光景は，（情けない，という意味で）あわれ，というか，それを通り越して，滑稽でさえあります．ここまでくると，笑うしかないでしょう．

Q. 4　論理学の話を聴いて，以前読みかけて挫折した『論考』への興味が再沸しました．しかし，私が持っているのは訳書なので，いずれはドイツ語まで学ばねばならないと考えると，語学は得意でないのでくじけそうです．

A. 4　『論理哲学論考』が言いたいことは，日本語訳でも，かなり，伝わるように思います．

例えば，4.121 Der Satz kann die logische Form nicht darstellen, sie spiegelt sich in ihm. は，

Propositions cannot represent the logical form: this mirrors itself in the proposition. (C. K. Ogden の英訳)

文 [=命題] は論理形式を呈示することができない．論理形式は文のなかに反映するのである．(中平浩司訳，ちくま学芸文庫)

命題は論理的形式を叙述することはできない．論理的形式は，命題のうちに映しだされるのである．(山元一郎訳，『世界の名著，ラッセル・ウィトゲンシュタイン・ホワイトヘッド』所収)

命題は論理形式を叙述することはできず，それ [論理形式] はそれ [命題] のうちに自己を写すのである．(末木剛博訳，『論理哲学論考の研究』所収)

命題は論理形式を叙述できない．論理形式は命題のうちに反映する．(坂井秀寿訳，叢書・ウニベルシタス)

命題は論理形式を描写できない．論理形式は命題に反映されている．(野矢茂樹訳，岩波文庫)

命題は論理的形式を描き出さない．映し出す．(木村洋平訳，詩として訳された『論考』)・・・詩かなにか知らないが，後半の構文が訳文では逆になってわけがわからなくなっていて，よくない．

他に，少なくとも，D. F. Pears と B. F. McGuiness による，もう一つの英訳と，日本語訳全集の奥雅博訳を参照するべきところですが，手許にないので，これで我慢しましょう．末木剛博訳は，２巻本の大著なので，図書館で読むことにして，中平浩司訳は，持っていてもよいと思います．ドイツ語で読まなくても，他の日本語訳と比較しながら読むといでしょう．この本には，大抵の訳書に訳されている，ラッセルの序文に加えて，ラムジ（ー）の書評も訳されているので，とても参考になります．

Q. 5

A. 5　・・・

西洋中世哲学史　第 7 回（2015.05.28.）

Q. 1　学生が論理学を学ぶようにするにはどうすればいいかについてですが，先生のおっしゃるように，大学にお金がないことが一番の問題だと思います．これを解決するには，広島大学を私立大学にして学費を上げ，講師を呼ぶしかないでしょう．もちろん，私は，学費が上がるのはいやですが...

Q. 1’（広大生の）論理学について，課題にしてしまえば良いと思います．

A. 1　貴重なご意見，ありがとうございます．「課題にしてしま」う，というのは，授業はしないで，教材を与えて課題を課す，ということでしょうか．その場合にも，提出された課題を採点したり，コメントしてやれる専門家がいるほうがよいのではないでしょうか．私学にして授業料を上げる，というのは，思いつきませんでしたが，そうしなくても，実は，今，在職している先生たちの多くが，ドイツ系の哲学を専門にしている人達ですが，（専門がドイツ系でもいいけれども）論理学を担当できる人を採用するようにすればいいのではないでしょうか．同じことは，フランス系，英米系の哲学に授業についても言えます．なんで，こんな風になっちゃんてるんでしょうね（私は，人事に一切かかわっていないのでわかりません）．

Q. 2　語学もそうですが，哲学者一人の思想を識るにあたって，必要となる前提知識が多すぎるように思えます．哲学という学問（に限った話ではないのかもしれませんが，それ以外の諸学問は道具主義的役割を強く持てるので，ここでは置いておくとして）に統合して進歩する余地（いわゆる真知に到達するといった）はあるのでしょうか．

A. 2　ありません，という立場では，哲学は，ある意味で，一人一人の哲学者において完結している，という見方をします．しかし，その一方で，アリストテレスが，『形而上学』α巻（アルパ・エラットン，第２巻）の冒頭で，次のようなことを言っています．

> *ὅτι ἡ περὶ τῆς ἀληθείας θεωρία τῇ μὲν χαλεπὴ τῇ δὲ ῥᾳδία. σημεῖον δὲ τὸ μήτ᾽ ἀξίως μηδένα δύνασθαι τυχεῖν αὐτῆς μήτε πάντας ἀποτυγχάνειν, ἀλλ᾽ ἕκαστον λέγειν τι περὶ τῆς φύσεως, καὶ καθ᾽ ἕνα ἢ μηχὲν ἢ μικρὸν ἐπιβάλλειν αὐτῇ, ἐκ πάντων δὲ συναθροιζομένων γίγνεσθαί τι μέγεθος·* [Aristoteles, *Metaphysica*, II, c. 1, 993a30-b (OCT, ed. W. Jaeger)]
>
> 真理についての考察は，ある意味では困難であるが，しかしある意味では容易である．その証拠は，誰も真理を的確に射当てることはできないけれども，しかし，すっかりこれに失敗しているわけではなくて，各人は自然（実在）について何らかの（真なる）ことを語っており，そして各人に即してみれば，真理に寄与するところが全くあるいはほとんどないかであるが，しかし，すべての人々が集まったものからは，何らかの（意味ある）ことが生じていることである．

これは，アリストテレスが，「真理」の探究としての哲学を，自分に先行する人々との共同探究 (*συζήτησις*) として捉える視点を示唆している，と言えるでしょう．だからといって，かならず「真理」に到達する，というわけではありませんが，少しは，近づくことができるという期待が込められいると思います．哲学の立場としては，自分で全ての領域を直接，実験したり，研究する，というわけではなくても（できることは自分でもやる必要がありますが），それぞれの領域の専門家の研究成果を利用させてもらう，という方法をとらざるを得ないとしても，ただ，無批判に，盲目的に研究成果を受け取るのではなくて，それが，何であるのか，そして，全体の中で，どういう意味をもつのか，ということを常に，わかった上で利用しなければならない，ということがあるでしょう．

Q. 3　よくレポートやテストで言われる論理的に書けということが，前回，今回の授業で理解することができた．

A. 3　どのように理解されたのか，よろしければ，教えて下さい．

Q. 4　論理学は，前回やったような基本的なことは，高校の数学や国語でやってもおもしろいのではないかと思いました．

A. 4　数学では，学習項目として，一部，取り入れられているはずですし，国語では，特に，現代国語で，接続詞の意味を理解して，作文する，あるいは，テクストを読解する（このことは，日本語ではなくて，外国語，英語の場合もあてはまる），という場合に，論理的整合性が求められるはずです．しかし，「論理」とか，「論理学」として学ばれていないので，意識しないのだとすれば，科目として，「論理学」というのをつくったほうがよいのかもしれません．

西洋中世哲学史　第８回（2015.06.02.）

Q. 1　自然学はギリシャ語で physica のようですが，この単語は英語の physical に綴りが似ています．しかし，英語の physical をもとに physica の意味を考えると，「自然学」にはたどりつかないように思います．この２つの単語は無関係なのですか？

A. 1　よい質問です．無関係どころか，英語の physical は，（品詞が違いますが），遡って行くと，ギリシア語の physika (←綴りに注意）にたどり着きます．たどってゆく順が逆で，ギリシア語の physika（自然学）が，ラテン語 physica → フランス語 physique(s) → 英語 physics (物理学）と変質してしまったのです．

英語の physical は，1) 自然の（物質の，物理的な）と 2)（精神や心と区別された物質的なものとしての）身体の，という意味で使われていて，容易に，「自然学」にたどりつきます．この場合，physical の同意語は，natural（ラテン語由来）で，反意語・対意語は，spiritual, moral や mental（３つともラテン語由来で，精神的な，心の，という意味）です．

Q. 2　アリストテレス『形而上学』からの引用の文は，抽象的で，意味不明すぎて，私には理解できませんでした．すいません．

A. 2　二千何百年も前の，異国の人（アリストテレス）が当時の言葉（古代ギリシア語）で言っていることですから，そう簡単にわかるはずがありませんので，謝る必要はありません．何を言っているのかを理解するためには，訳しただけでは無理で，前提となっていて，いちいち説明されていない，あれこれの考え方や概念を知らなければ（勉強しなければ），わからなくても当然ですので，心配しなくても大丈夫です．ただ，予備知識・前提となる概念・考え方についての知識なしに，訳文だけ読んで理解できるような訳文をつくるのは難しいと思います（説明的な，原文より，かなり長い訳文になると思います）．

Q. 3　『神学大全』第１部第１問題第２項の一つ目の異論の三段論法はかなり綺麗にまとまっていてかつ，内容は神学の痛い所を突いてあって，こういう反対意見を出せるように研鑽したいと思います．

A. 3　どういう研鑽をつむべきか，何か考えはありますか？

Q. 4　形而上学は言ったもの勝ちな感じがしますが，いつか普遍的な意味付けがなされるのでしょうかね．原著は未読ですが，論考（ママ，ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』）で無理だよと証明したという話を聴きましたが．下学（自然学）（ママ，下学は，形而下学のことか）にしても，不完全性定理，不確定性原理，事象の地平線やらとそろそろ人類詰んでるそうですが．

A. 4　「詰んでる」という表現の意味がわからなかったのですが，将棋や囲碁のように，投了して勝敗がついて，終わっている，という意味でしょうか．

学（哲学も，それ以外の領域学・個別学も）は，人間がやるかぎり，すべて，仮言推理（もし〜だとすれば，・・・である）という形式の連鎖・積み重ねの形で表現されざるを得ないと思います．仮言（条件）の「もし〜だとすれば」の部分を，できるだけ，「・・・である」と言えるように探究するのが，学問の仕事ですが，常に，この仮言（条件）の部分は，何か，残って，完全に定言的に主張できるようにはならないでしょう．しかし，だからといって，早々に，探究するのをあきらめてしまうのと，少しでも，確実に言えることを探究していこうとするのとでは，生き方（まさに，人の生き方であって，行き方ではない）に大きな違いがあると思います．この点，クセノパネス（断片 18) にハゲドウ（激しく同意）したいところです．

ヴィトゲンシュタインが，『論理哲学論考』で言っていることは，次のようなことです．

6.53

Die richtige Methode der Philosophie wäre eigentlich die: Nichts zu sagen, als was sich sagen lässt, also Sätze der Naturwissenschaft — also etwas, was mit Philosophie nichts zu tun hat —,

und dann immer, wenn ein anderer etwas Metaphysisches sagen wollte, ihn nachzuweisen, dass er gewissen Zeichen in seinen Sätzen keine Bedeutung gegeben hat. Diese Methode wäre für den anderen unbefriedigend — er hätte nicht das Gefühl, dass wir ihn Philosophie lehrten — aber s i e wäre die einzig streng richtige.

The right method of philosophy would be this. To say nothing except what can be said, *i. e.* the propositions of natural science, *i. e.* something that has nothing to do with philosophy: and then always, when someone else wished to say something metaphysical, to demonstrate to him that he had given no meaning to certain signs in his propositions. This method would be unsatisfying to the other — he would not have the feeling that we were teaching him philosophy — but it would be the only strictly correct method.

哲学の正しい方法とは本来，次のごときものであろう．語られうるもの以外なにも語らぬこと．ゆえに，自然科学の命題以外なにも語らぬこと．ゆえに，哲学とはなんのかかわりももたぬものしか語らぬこと．—そして他のひとが形而上学的なことがらを語ろうとするたびごとに，君は自分の命題の中で，ある全く意義をもたない記号を使っていると，指摘してやること．この方法はそのひとの意にそわないであろうし，かれは哲学を学んでいる気がしないであろうが，にもかかわらず，これこそ唯一の厳正な方法であると思われる．[坂井秀寿訳]

「形而上学的なことがら」を，ここでいう哲学の方法では，語ることができないから，沈黙しなければならない，ということを言っているのであって，語ることができない「形而上学的なことがら」を考察したり，探究することができないと言っているわけでありません．実際，後期へいたるヴィトゲンシュタインは，「神秘的なことがら」を探究しつづけているとも言えるのであって，『論考』で，哲学の問題は解決した（実は，解決したというよりも，語れないことは語らないことにした）と思っていたけれども，それでは，済まない，と，再び，ヴィトゲンシュタインは，哲学に戻ってきて，『論考』では，語ることができないとして片付けてしまったことを，なんとか，語ろうと苦労しているのです．

これに対して，『論考』の言うことを，能天気に，分かりやすい所だけ（つまり，自然科学の命題だけ）を取り上げた，いわゆる，ウィーン学団（当初の中心は，シュリック）の人たちは，（細かくみると，彼らの専門分野によって違いはあるでしょうが），周囲への影響とは，裏腹に，その扱い得る対象領域の狭さと，検証理論とともに，哲学の立場としては存立し得なくなっているのではないでしょうか．ですから，個人的なつながりは別として，ヴィトゲンシュタイン自身は，ウィーン学団とは一線を画して遠ざけているように思います．

ヴィトゲンシュタインは，自らの『論考』で，語り得ないとした，「形而上学的なことがら」（あるいは「神秘的なことがら」）を，なんとか，語ろうとして，多くの，ノートや未定稿を残しましたが，生前には，公刊されなかった（つまり，自分の学生たちや親しい人たちには語ったが，公には，沈黙していた），ということでしょう．

次に，「不完全性定理，不確定性原理，事象の地平線」などを，自分で，理解できるところまで，調べて理解しようとせず，ファッション的に使って分かったふうな言い方をするのは，私の考える哲学の態度とは，もっとも遠いところにある，きわめて怠惰な態度だと思います．赤井を挑発するために，わざと言っているのなら，そういうことはやめて下さい．

今，物理学に関わると思われる，「不確定性原理，事象の地平線」には，触れませんが，「不完全性定理」も含めて，これら３つに共通しているのは，人間が認識したり，理解したり，知ったりできない部分がある，という点で，これを人間の（認識の）限界として強調したいので，こういう言い方をするのでしょうか．「不完全性」という言葉が何を意味するのか，分からずに，思いつきで，勝手に言葉が一人歩きしているのではないですか．

最初の「不完全性定理」について言えば，ゲーデルは，「完全性定理」も証明しているんではないですか？「完全」なのか「不完全」なのか，矛盾しているのではないですか？ だから，「人類詰

んでる」んですか？

自分が使っている「完全」や「不完全」が何を意味しているのか，分かっていますか？ 分かっていて使っているなら，完全に，赤井に対する挑発，と思われるし，分かっていないのならば，意味のない言葉遊びをするのはやめろ！ と，言いたいところです（もう，言ってますけれども）．

論理学を学んでいない人にも，なんとか分かってもらえるように，順を追って，説明すると，ゲーデルが，1929 年に書いて，1930 年に公刊したのが，「第 1 階の述語論理に関する完全性定理」で，1930 年に書いて，1931 年に公刊したのが，「ペアノの算術の公理系を含む無矛盾な形式的体系（算術を含む無矛盾な体系）に関する不完全性定理」です．つまり，「完全性定理」が対象とするのは，「第 1 階の述語論理」であり，「不完全性定理」が対象とするのは，「算術を含む無矛盾な体系」であって，対象が違います．次に，「完全性」というのは，ゲーデルが言ったのではなくて，もともと，ヒルベルトが，公理系に関して，

完全性：すべての定理がその公理系から得られること．

独立性：その公理系から任意に一つの命題を除くと，証明できない定理が存在すること．

無矛盾性：その公理系から互いに相矛盾するような諸定理を証明することができないこと．

という 3 つの条件・性質を挙げたことによります．これらの中で，完全性と無矛盾性の関係が重要です．そして，述語論理に関しては，ヒルベルトとアッカーマンは，1928 年の『数理論理学の基礎』で，述語論理の無矛盾性を証明し，完全性の問題は未解決問題として残しています．そして，述語論理を第 1 階と第 2 階に区別しています．第 1 階の述語論理は，個体変項だけに量化子がついて，限量されている述語論理で，授業で配布した「論理学」のプリントで説明しているのは，この第 1 階の述語論理です．

従って，「第 1 階の述語論理に関する完全性定理」は，第 1 階の述語論理では，すべての定理がその公理系から得られる，と言っているのです．これに続いて，「ペアノの算術の公理系を含む無矛盾な形式的体系（算術を含む無矛盾な体系）に関する不完全性定理」は，算術を含む無矛盾な体系では，すべての定理がその公理系から得られない，と言っているのです．これは，詳しく言えば，「無矛盾な体系には，決定不可能な（肯定も否定も証明できない）命題がその体系内に存在する」（第 1 不完全性定理）と，「算術を含む形式的体系の無矛盾性は，その体系の内では証明できない」（第 2 不完全性定理）という部分からなります．

ここまでを理解した上で，「人類詰んでる」というのは，勝手ですが，むしろ，「無矛盾な体系」の中では，「すべての定理がその公理系から得られないこと」（不完全性）があることが明らかになったことを，積極的に評価できるのであって，そういう見方ができない人は，かわいそうだと思いますが，人それぞれですので，勝手に，「人類詰んでる」と思っていればいいでしょう．そういう人は，私の考える哲学とは無縁の人です．

ついでに言っておくと，ここまでの話では，無矛盾な体系には完全性がなく（不完全性），完全性を保とうとすると，矛盾が生じる（無矛盾でなくなる），という関係にあるということです．そこで，ゲンツェンは，自然数よりもはるかに大きな超限順序数にまで帰納法を拡張し（超限帰納法），そのレヴェルでは，完全性を保った体系も無矛盾である（無矛盾性）ことを証明しています．

文献として，ゲーデル（林晋／八杉満利子訳・解説）『不完全性定理』（岩波文庫）の本文よりも，解説部分を読むとよいでしょう．

西洋中世哲学史　第９回（2015.06.16.）

Q. 1　コメントシートでの A4 は，先生は怒ってここまでの長文で返事をしたのでしょうか？それとも，哲学を学ぶものとしてのプライドでここまで長文になったのでしょうか？ この長文を読んで私は中途半端な知識で物事を言うのはよしておこうと思った．

A. 1　少なくとも，私が（わかっている人には余計な）説明をした程度に，ゲーデルの「不完全性定理」を理解しているならば，「・・・そろそろ人類詰んでるそうですが」とは言わないだろうし，わかった上で，「人類詰んでる」と言っているのならば，私の考える哲学とは無縁の人ですから，放っておけばよいのでしょうが，一応，この授業の受講生なので，その限りでは，「君の考え方，学ぶ態度が詰んでるよ」と言ってやる責任があると思ったからです．

さらに，こまかいことを言うと，1930 年に，ゲーデルが「不完全性定理」を証明した後，1949 年に，ヘンキン (Leon Henkin) が，ゲーデルとは，別の方法で，「不完全性定理」を証明しました．そして，第２階の述語論理に関しては，ゲーデルのやり方（解釈）では，やはり，「不完全」であることが証明されますが，ゲーデルのよりも，弱い（ゆるい）解釈では，「完全」であることが，ヘンキンによって証明されています．つまり，ヒルベルトのいう，

完全性：すべての定理がその公理系から得られること．

ということは，その完全性が，どのような体系（システム）で考えられているのかによって，成立したり，しなかったりする，ということがわかってもらえればよいのです．対象とする体系（システム）のとりかたによって，「完全」であったり，「不完全」であったりするのです．決して，人間の理性や知性が不完全で限界があるから，もう人類は終わりだ，などと言っているのではないのです．

Q. 2　継起（推論）の必然性などを今まで考えたことがなかったので，なるほどと思いました．

A. 2　アリストテレスの論理学を学べば，重要な問題のひとつですから，13 世紀のトマスも指摘しているのですが，これをどう考えるか，簡単な問題ではありません．

Q. 3　アリストテレスの学問についての「必然性」「蓋然性」「偶然性」の文章は，改めて言われると，「あぁ，そういえばそうやなぁ」と入ってきました．こういったことを言葉にして，形にして論ずるのは自分では困難なものですね．

A. 3　これも，アリストテレスの論理学書のひとつ，『分析論前書』で扱われていることがらですが，後になってから（現代），様相論理という論理学の一分野になっています．ただし，授業で紹介した，『形而上学』第６巻の記述は，事象（できごと）に関して，「必然」「蓋然」「偶然」の３つの観点から分類して，「必然」的に起こることがら（第一哲学，自然学，数学）と，「蓋然」的に起こることがら（倫理学，政治学）には，学知 (エピステーメー）が成り立つと言っているのですが，『分析論前書』では，推論（三段論法）に用いられる，前提命題が，「A は B である」とか「B は C である」と言うときに，「A は B である」というのを，普通，私たちは，「A は（必然的に）B である」と言っているのか，「A は（可能的に）B である」といっているのか，という区別をする観点を導入します．この，「必然的に〜である」とか「可能的に〜である」というのを，様相というのです．そして，「必然的に」とも「可能的に」とも言われていない通常の命題を，無様相といいます．

ただ，アリストテレスが区別して，命題の形で示している様相を，それぞれ，どういう名称で呼ぶか，ということになると，日本語での訳語が定まっていないように思います．論理学者の用語の一例を挙げると，アリストテレスは，「必然 (necessary)」「偶然 (contingent)」「可能 (possible)」「不可能」を区別しているので，「不可能」が「可能」の否定であれば，「必然」の否定（「非必然」），「偶然」の否定（「非偶然」）も様相に数えることができることになります．そして，先に，「無様相」と言った，様相のない通常の命題を，「実然 (assertoric)」命題といい，これも，「様相がない」という様相と見なすと，この「実然」の否定（「非実然」）も考えられて，様相の種類は，合計８つ，ということになります．

西洋中世哲学史　第 10 回（2015.06.23.）

Q. 1　フッサールがジークヴァルトを批判したように，推論の必然性を人間の頭の中だけの主観的なものとすることを批判するならば，現在の科学も人間がただ法則をつくって勝手に思い込んでいるだけで，本当にそのような必然性があるかは分からないということになるのですか．

A. 1　ジークヴァルトは，そう考えていないけれども，フッサールから見れば，ジークヴァルトのやり方では，推論の必然性を人間の頭の中だけの主観的なものでしかない，と言っているわけで，ジークヴァルト自身は，客観的な必然性があると思っているし（ですから，ジークヴァルトにとっては問題はありません），それを批判するフッサールも，ジークヴァルトとは別の仕方で，客観的な必然性を確保しようとしているのです．しかし，フッサールが，それに失敗していれば，フッサールにとっては，客観的な必然性は保証出来ないことになります．

Q. 2　仰る通りに考え方，学ぶ態度が詰んでいたので，批判されたかったのです．じっくり拝読させて頂きます．教授（ママ，准教授です）が話中で仰った「虚しい，立場が違うで終わってしまう」というのは，私の詰んでる考え方に通じるものを感じました．

A. 2　「虚しい，立場が違うで終わってしまう」というのは，話が通じない連中がいる，という意味です．「虚しさ」の意味が違うと思います．大抵の事柄は，少数でも，話が通じる（理解してもらえる）人たちがいます．全ての人たちに，（現時点で）分かってもらうために，努力するのは，「虚しく，立場が違うで終わってしまう」ので，そういう努力をする時間と労力があれば，別の問題の解明に，それを使ったほうがよい，と最近では思っています．

西洋中世哲学史　第 11 回（2015.06.30.）

Q. 1　論証を全体として「必然的」と名付けることが問題となるのはなぜなのでしょうか．わかりそうでわかりません．

A. 1　全体として「必然的」と名付ける，というのではなくて，二つの前提命題から，「必然的に」，結論命題が導き出される，というに注目しているのです．

Q. 2　叱ってもらえる内が華という言葉は心にとめておこうと思った．

自分も怒られると気持ちが沈んでしまう方なので気をつけようと思った．

腰痛い時はお尻のストレッチすると良いらしいですよ．

A. 2　本当にそう思います．叱ってくれる人がもういないような年齢になると，騙されたり，陥れられたり，情報を与えられなかったりするばかりですから．腰痛のほうは，今週になって，すこし回復しました．

Q. 3　推論の必然性とは同一であることの必然性だと思います．同一であると"みなす"のは理性の抽象作用ではないでしょうか．

A. 3　フィヒテのような，発想，というか，表現ですね．1794 年の『全知識学の基礎』（古い岩波文庫の上下二冊，木村素衛訳で読めます．I. G. Fichte, *Grundlage der gesammten Wissenschaftslehre*, 1794. を読んでもらったほうがわかりやすいと思いますが）を読んだことはありますか．フィヒテは，A = A は，なぜ，そうなのか，と問うて，結局，Ich = Ich に根拠がある，というようなことになっています．しかし，これを，ヘーゲルは，『フィヒテとシェリングの哲学体系の差異 (*Differenz des Fichte'schen und Schelling'schen Systems der Philosophie*, 1801)』の中で，批判して，大体，こういっています．フィヒテは，「自我は自我である (Ich bin Ich)」という主観と客観の同一性 (die Identität des Subjekt und Objekt) を絶対的原理としているけれども，この同一性は，純粋意識 (reine Bewußtsein) または純粋自己意識 (reines Selbstbewußtsein) であって，すでに，捨象 (die Abstraktion) という手続きを経たものであり，これ自体は，同一性であっても，経験的意識の世界，つまり，有限で対立をもつ（現実の）世界とは，対立するので，経験的意識の世界での，同一性（A = A）を説明できない，あるいは，導出できない，というのです．

Q. 4　写本を行う際に，写本をしている者が，こうした方がよいだろうと思って原典とは違うことを書いてしまう，というのはとてもありがちな話が人間味あふれる面白い話だと思いましたが，一方で，そうした原典ではないテキストを扱うときには注意が必要だと感じました．

A. 4　ですから，ギリシア語やラテン語の写本の現物がない，日本ではできない演習ですが，同一のテクストの，異なる複数の写本を比較しながら読んで，オリジナルを想定する文献学的演習では，一読して，わかりやすい表現の写本と，文法的に間違っているんじゃないか，と思うほど，わかりにくい（が，よく調べると，間違っているわけではない）表現の写本がある場合，わかりにくいほうを，オリジナルか，より，オリジナルに近いと判断して，それを選択するのです．それは，一見して，オリジナルを書いた原著者が苦労して考え出した，わかりにくい表現は，書き写す人が，自分にわかりやすい表現に書き換えてしまうことがある，ということと，誰が読んでもわかりやすい表現は，表面的で，それだけのものでしかないことが多いけれども，一見，わかりにくい表現は，読む者を考えさせ，その表現の背後に，より深い意味を含んでいることがあるからです．

西洋中世哲学史　第 12 回（2015.07.07.）

Q. 1　フィヒテの言う自我は，心理学的なものではなくて，存在論的なものに感じました．

ところで推論の必然性は精神，思考の法則に帰属するのか，事柄自体に帰属するのかという問題は，精神と事柄，その関係の在り方に帰属することはできないのでしょうか．精神なしに事柄は推論されませんし，事柄なしに精神は推論できないと思うのですが．

A. 1　心理学はまったく関係ありません．心理学とは関係なく，個我が問題となっているのか，そうではないのかは問われます．

「ところで」のほうですが，パースは，天才だと思いますが，そのパース (Ch. S. Peirce) が，天才だと認めている，友人の F. E. Abbott(1836〜1903) の考え方を紹介しましょう．アボットは，客観的相対主義 (objective relativism) という立場をとったことになっていますが，それによれば，個物だけでなく，関係も実在する．そして，私たちが採用する視点の変化に応じて，世界の意味も変化する，そういう関係構造を世界が客観的にもつ，というのです．これだけでは，わかりにくいし，誤解されるかもしれませんが，私たちが個物を捉える捉え方が変わると，関係も変わる，というのでは，個物の捉え方に関係が従属する，ということになりますが，そうではなくて，むしろ，まず，個物と関係は同時に実在する，というか，むしろ，まず，関係が実在する，そして，関係によって，むしろ，後から，関係の捉え方が明らかになる，というほうが適切かもしれません．これは，ひょっとすると，パースの「連続性」の哲学に繋がっているかもしれません．アボットについては，

Schneider, Herbert. W., *A History of American Philosophy*, New York: Columbia University Press, 1946. pp. 281–284.

にある，シュナイダーによる紹介と，そこに引用されている，

Abott, F. E., *Scientific Theism*, Boston, 1885.

のテクストを参照．アボットの著作としては，もうひとつ，遺著となった，

The Syllogistic Philosophy, 1906.

があるので，これらを読んでからでないと，詳細を述べることはできませんが，シュナダー (前掲書，p. 282) によれば，早くも 1864 年の論文で，アボットは，「関係は決して感覚知覚の対象ではありえない．（しかし）我々は実際に諸事物の客観的諸関係を知っている．（だから）諸関係をとらえる純粋で直接的な認識能力があるはずである」と言っているようです．この認識能力をめぐっては，アボットは，カントの現象（現象界）とヌーメナ（叡智界）の区別を批判していて（ただし，アボットのカント解釈はロイスによって批判された)，ヘーゲルのカント批判に近いように思われますが，どうもヘーゲルとは異なり（アボットはドイツ観念論的前提に立たない)，そうかといって，スコットランド常識学派とも異なり，コールリッジ主義者の言う reason や understanding とも異なる，the perceptive understanding(知覚の力をそなえた理解力，うまく訳せません) と言っているようです．カント，ロイス，パースの文献にも目を通して，アボットのテクストに取り組めば，充分，手応えのある（アメリカ近現代哲学史をふまえた）哲学の卒論が書けるテーマなのですが，誰かやってみようという人はいないでしょうか．

さらに，ボルツァーノ (Bernhard Bolzano, 1781–1848) の「命題自体 (Satz an sich)」という考え方がありますが，これは，その立言（「〜は・・である」という命題）が真か偽かにかかわらず，誰かによって言葉のうちでとらえられているか否かにかかわらず，また，精神のうちでのみ思考されているか否かにかかわりなく，あるものが存在しているか否かの立言で，通常，我々のいう命題は，外的な客観的存在を前提とする立言された命題 (ausgesprocher Satz) か，内的な心のはたらきを前提とする思考された命題 (gedachter Satz) であるが，このいずれとも異なる，といいます．つまり，人間などが，思いもつかない命題自体が（おそらく無数に）ある，というわけで，思いつくものの例をあげると，「四角は丸い」も命題自体としてある，というわけです．これは，人間の認識や思考作用との関連をすべて捨象してもなお存立している論理的存在を意味しているのです．ボル

ツァーノは，宗教的にはカトリックで，数学者・論理学者でもありましたが，*Wissenschaftslehre*, 4Bde. という重要な著作を残しており，この中で上記の考えを前提として述べています．「命題自体」という考え方は，数学との関連で出てきたものと思われます．この反プロテスタント（すなわち，カトリック），反カント主義の系列は，ボルツァーノ—F. ブレンターノ—フッサールと続き，ボルツァーノの「命題自体」という考え方は，フッサールの Sinn にも影響を与えています．ここでのポイントは，認識主体である人間がいなければ，思考や推論という精神活動などない，という，一見，誰にでも受け入れられそうな，（私に言わせれば）甘ったれた考えに，喝をいれてくれる，人間の精神ごとき，あろうがなかろうが，そんなことには関係なく，「命題自体」はある，というボルツァーノの考え方です（そう主張しているのは，ボルツァーノの精神なのでしょうが，ボルツァーノなら，自分がいなくても，ある，というでしょうが）．

また，さらに，詳しい話は省きますが，ホワイトヘッドが，*Process and Reality*（『過程と実在』の中で，抱握 (prehension) や感受 (feeling) など，独自の表現で彼が語る，はたらきをなす主体 (subject) と，その対象 (object) となるものを，最終的には，（この表現には問題があるかもしれないが）解消するものとして，superject（平林康之先生の訳では，「自己超越体」）なるものを持ち出しますが，これも，ボルツァーノほど過激ではないけれども，少しマイルドに，主体（精神）と客体（事柄）という枠組みに慣れてしまっている考え方に，喝をいれてくれるものです．

なお，ボルツァーノもホワイトヘッドも，禅宗ではありませんから，「喝をいれる」（考え方が違うことを諭す）は変ですが，「活を入れる」（元気づける）では，意味が違うので，前者の表現を使いました．

Q. 2　現代で高く評価されているものが，出版当時はメインストリームからはずれた異質のものとしてしか扱われなかった，ということにとても驚きました．

私は生きている間に評価を受けたい凡人タイプだと思います．研究者としては，他人に笑われるくらいの独創性やアイデアが必要かもしれませんが．

A. 2　哲学などの著作でもそうですが，音楽など，芸術作品ではもっと頻繁にあることでしょう．これは，作品・著作を評価する側の理解力・力量の問題で，発表当時は，評価する側の理解力がついていっていない，ということなのでしょう．もっとも，本当に駄作だから評価されないのか，本当は優れた作品なのに，評価する側の理解力がついていっていないだけなのかは，時間が経たないとわからないわけですが．しかし，同時代の人たちに好評だったけれども，時間が経つと，作品の程度が知れて，顧みられなくなり，すたれてしまうものも少なからずありますから，私は，どちらかというと，同時代に人たちに評価されなくても，100 年後，200 年後に，本当の価値がわかる人たちに認めてもらえればよいと思います．

Q. 3　方法序説（ママ，『方法序説』）が当時は批判されていたというのが意外でした．ど（っ）ちみち評価されるのであれば，自分が生存しているうちにされたいですね．

A. 3　Q. 2 と同じことですが，『方法序説』が当時は批判されていたというのは，正確ではありませんので，訂正を要します．デカルトは，ガリレオの裁判のこともあり，フランス本国では，出版できずに，より自由だった，オランダで，多くは，出版しています．そして，出版できるということは，当時，少なくとも，少数ではあっても，デカルトの立場を理解していた人たちがいたことを意味します．ですから，A. 2 を少し，訂正すると，同時代には，少なくとも誰か一人でも，理解してくれる人がいればよい，ということです．

そこで，私は，ここのところ，Sibi Scribere（「自分のために書く（こと）」というラテン語）という，本文がラテン語の論文を書いています．ニーチェが好んで引用した，V. Rose（ファレンテン・ローゼ）のことばらしいですが，ニーチェは，「後世のために書くのではなく，自分自身の後世のために，つまり，自分の晩年のために書く」(『人間的，あまりに人間的』II, 1, 167.) と言っていますが，私は，同時代のラテン語のわかる人たち（少数）に向けても書いています．

西洋中世哲学史　第 13 回（2015.07.14.）

Q. 1　パースは天才だとありますが，どのような点を評価されていたのですか？ 哲学界（哲学会？ 哲学の世界？）での天才の定義とはどのようなものなのでしょうか？

A. 1　「天才」論にはかかわりたくないので，「天才」の部分を「非常に優れた，独創的な人」に訂正します．ただ，私の，日常的語法では，「まねしたくてもできないほど非凡な」という意味で使っています．

「哲学界（哲学会？ 哲学の世界？）での天才の定義とはどのようなものなのでしょうか？」という問いには学問的に責任をとれる答をすることができません．というのも，それに答えるだけの学殖が私にはありませんから．

ただ，この問いの意味は，少なくとも，二通りに解することができます．ひとつは，「哲学の分野での天才の定義は何か？ つまり，哲学の天才とは何か？」で，もうひとつは，「哲学としては，一般に，天才というものを，どういうものとして定義しているか？」ということです．

おそらく，まず，「天才」についての一致した定義はないと思います．というのも，例えば，ドイツのシュトルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）時代以降，18 世紀のカントの『判断力批判』，それ以降のシェリング，ショーペンハウアー，F. シュレーゲル，ヘーゲルなども「天才」を論じていますが，いずれも，天才を芸術の領域に限定しているので，一つ目の「「哲学の分野での天才の定義は何か？」という問いに対しては，彼らに従えば，「ない」ということになるからです．

では，二つ目の問に対しては，例えば，カントに従えば，天才というのは，生まれつきの心的素質を通して自然 (Natur) が芸術に規則を与えるものであり，天才には，独創性，範例性，自然性という特質がある，ということになり，芸術はその天才の技術であって，それを判定するには，趣味 (Geschmack) が必要である，というのです．カントがいう自然（ナトゥーア）は，難しいのですが，もう少し昔の人なら，神というところではないかという気がします．さらに，趣味（ゲシュマック）というのも，『判断力批判』によれば，「趣味とは美を判断する能力である」「美的判断は趣味判断である」という意味なので，今の日本語で「趣味」ときいて，自分が勝手に思い描く意味で理解してもらっては困ります．カントはさらに，「美的判断」を「質料的美的判断」と「形式的美的判断」とに区別し，「形式的美的判断」だけを「純粋な判断」とみなして，（ここで，「純粋な (rein)」というのは，「経験的でない」という含みがあるように思います）この，「純粋な判断」にだけ妥当する「美的共通感覚」を前提として，「主観的普遍妥当性」を基礎づけようとしたのが，『判断力批判』の課題のひとつです．もっと，カント学者に怒られるのをかまわずに，わかりやすく言えば，芸術作品を鑑賞する人によって（主観的に）それぞれ評価が違っていてもおかしくないのに，大体，多くの人が，天才がつくった芸術作品を「美しい」とか「すばらしい」と一致して（「主観的普遍妥当性」）いうのは何故か，それは，人には「美的共通感覚」があって，それによって「主観的普遍妥当性」があるのだ，という感じでしょうか．カント以降，カントが考察の対象から除外した，「質料的美的判断」，つまり，経験的・感覚的な趣味を取り上げる連中があらわれたりして，いろいろな理論あるようですが，それは，美学や芸術学の専門家にお任せします．

私自身は，他人（天才）がつくった作品を，後から，あれこれ，言うよりも，下手で美しくなくても，自分でも書いたり，描いたり，音を出したりするほうが，あっていると思います．他人の作品を美しいと感じたら，黙って味わうほうがよくて，言葉で，あれこれ，言うと感動が台無しになりますので．そういうわけで，「天才」論にはかかわりたくないのです．

ところで，私の言う意味での，パースの天才ですが，彼は，ハーバードの数学教授だった父から，その天才を認められて，10 歳前後から，高度の数学や化学実験の手ほどきを受けて，学生時代，３年以上も毎日２時間，カントの『純粋理性批判』を読んでいて，ほとんど暗記してしまった，とか，20 代に, ブールやド・モルガンらの数学的論理学を改善・修正する論文を何本も発表していたり，その後も厖大な著述があり，今も，批判的校訂版が刊行中で，全貌がわかって，正当に評価されるのはこれから，ということです．

西洋中世哲学史　第 14 回（2015.07.21.）

Q. 1　形式の妥当性と命題の真偽の違いの説明がわかりやすく面白かったです．

A. 1　前提命題の真偽を，食材の善し悪しに，推論の手続きの妥当性を，調理方法の適切さに例えたのですが，命題の真偽は，真（真理値 1）と偽（真理値 0）の２値だけと想定しているので，食材も，新鮮か，腐っているか，という２つの場合だけで考えましたが，現実には，食材のよしあしには，段階的な程度の差があるので，それに応じて，それぞれの食材に適した調理方法も変わってくるはずです（もっとも，完全に食べられないような程度の食材では，どう調理しても仕方ありませんが）．

そうすると，逆に，命題の真偽に関しても，もっと段階的な程度の差がある，とする論理学も考えられます．つまり，命題の真理値は，真と偽の２つだけでなく，第３の真理値，第４の真理値・・・と多くの真理値を想定する論理学があり，多値論理と呼ばれます．真と偽の２つの値だけを想定する論理学は，２値論理と呼ばれます．３つの値までを想定するのは，３値論理ということになりますが，その場合，真理値 1，真理値 0 に加えて，第３の真理値を，1/2 とするか，2 とするか，人によって違いますが（その場合，1/2 とか，2 とかいうのは，現実の世界ではどういう意味なのかを考えるのは，また，別の仕事です），その３値論理に悲して，前回のコメントで言及した，パースには，これは全てのモデルで成立するわけではありませんが，「パースの法則」と呼ばれているものがあります．参考までに，それは，次のようなものです．

p ⊃ q. ⊃ p:⊃ p（p と q は，命題を表す）

西洋中世哲学史　第 15 回（2015.07.28.）

Q. 1　約半年間，ありがとうございました．

哲学史というよりは，論理学の話がほとんどだった気がしますね．

A. 1　もともとの予定では，「必然性」の話の後，次の話題として「三位一体」の謎，というのを用意していたのですが，予定外に「必然性」の話に時間をとられて（というよりも，コメントに時間をとられて），そこまで行けませんでした．しかし，その分，一方通行的な講義ではなくて，出席者からの質問に答える，という意味で，多少は，双方向的なやりとりができたのでないでしょうか（と自画自賛しておかざるをえない感じです）．

ところで，中世哲学史と論理学のことですが，二十世紀後半以降，中世哲学史やとくに中世の論理学史を研究している人たちからみると，中世という時代は，論理学のレヴェルからすると，決して暗黒時代などではなくて，むしろ黄金時代と言えるのです．これに対して，近世，ルネサンス期には，論理学は，逆にやせ衰えて，近世はその後も，論理学は低迷し，近世は，論理学史上，暗黒時代と言ったほうがよく，これが，十九世紀末から二十世紀にかけて，ようやく中世の水準にたどり着く，という印象です．古代から中世，特に，十三，十四世紀までに，現代論理学に匹敵する，論理学の基本概念（命題関数や，限量論理学，様相論理学など）が，ほぼ，出そろった（そして，その後，近世初頭に一旦忘れ去られる），と言えるのですが，これらは，当時の自然言語（つまり，ラテン語）で記述されていた点が，現代の記号論理学とは違う点です．従って，中世哲学史として，神学と哲学の問題とならんで，論理学を取り上げることは，西洋中世哲学史のひとつの特徴に光を当てていることになるので，決して，適切ではない，ことはない，と講義担当者としては思っています．

Q. 2　アリストテレスやフッサール，ボルツァーノ，オルテガなど，さまざまな人の意見を見てきましたが，どれも興味深かったです．誰かの意見に最も賛成かと聞かれる（ママ，訊かれる）と迷いますが．．．．．．ありがとうございました．

A. 2　授業では，プラーグマ（事象）の必然性と，コンセクエンチア（推論）の必然性の問題は，ある意味で，アリストテレスの『分析論前書』『分析論後書』に端を発して，その後，この問題に言及し，考察を加えた，古代末期から，中世，近世の人たちの見解を概観したのですが，それらの中で，年代順ではありませんが，取り上げたものを見てみると，ポール・ロワイヤル（アルノーとニコール）の『論理学』（17 世紀），フッサールの『論理学研究』（20 世紀前半），ソラブジのアリストテレス研究（20 世紀後半），トマス・アクィナスの『アリストテレス分析論後書註解』（13 世紀），デッテルのアリストテレス研究（20 世紀後半），サン・トマのヨアンネスの『論理学』(17 世紀)，ロバート・グロステストの『アリストテレス分析論後書註解』（12-13 世紀），ザバレッラの論理学書（16 世紀），ボルツァーノの *Wissenschaftslehre*（19 世紀），クーチュラ編のライプニッツの遺稿（17 世紀），カッサンとナルシのアリストテレス研究（20 世紀），オルテガのライプニッツ研究の中で言及されたアリストテレス（20 世紀），ベルティのアリストテレス研究（20 世紀），となっていて，それぞれ，原典テクストをあげて紹介したので，使用言語は，ギリシア語，ラテン語，フランス語，ドイツ語，英語，スペイン語，イタリア語に及んで，ちょっと大変だったかもしれません．しかし，中世哲学史を研究するには，最低でも，これくらいの文献を読む必要があるということを知ってもらいたかったのと，ちょっと，おかしな言い方かもしれませんが，低地ドイツのプロテスタント的な，カント以来の系統とは違う，もっと南のドイツ・オーストリア（チェコやハンガリーも）のカトリック的な，ボルツァーノ，ブレンターノ，（フッサール）の系統は，論理学に関して，独自のものをもっている，ということも知ってほしかったのです．オルテガに関しても，『大衆の反逆』のオルテガではなくて，原典テクストに基づいた，哲学史研究もやっている，哲学史家としてのオルテガの実力も知ってほしかった，ということです．